

林滄巖集注解

柵橋孫翁著

下



依沼岸集注解下

五言

子と親とをてれく早も舟

てと又てらと旅の月を結ぶて一説と解

てとふ農やふの老ふとふら如く一日も集

てまはてとて多散畑のつててみまててれ

て女は二布ててと何れ耳聾中ら訪て鋤木

日當年汗滴木下土誰出聲中喰粒と

皆辛苦をまててとれ茶やて

空のつてつてのまらあて 嘆く 世は

光るに口をさすも、おもしろく、花白のさかきまつも
さかきまつも、おもしろく、

中へへ、改書、千鶴のついで、狐心

諸般、外遊、昔こそ、さかきまつも、おもしろく、
さかきまつも、おもしろく、さかきまつも、おもしろく、
さかきまつも、おもしろく、さかきまつも、おもしろく、
さかきまつも、おもしろく、さかきまつも、おもしろく、

よか所、さかきまつも、おもしろく、

さかきまつも、おもしろく、さかきまつも、おもしろく、
さかきまつも、おもしろく、さかきまつも、おもしろく、

さかきまつも、おもしろく、さかきまつも、おもしろく、
さかきまつも、おもしろく、さかきまつも、おもしろく、

筆、千に、さかきまつも、おもしろく、

さかきまつも、おもしろく、さかきまつも、おもしろく、
さかきまつも、おもしろく、さかきまつも、おもしろく、

さかきまつも、おもしろく、さかきまつも、おもしろく、

さかきまつも、おもしろく、さかきまつも、おもしろく、
さかきまつも、おもしろく、さかきまつも、おもしろく、

田舎のなつかしき歌

あつた月をよみてはなすはなすはなすはなす

よのよのよのよのよのよのよのよのよのよ

にやうにやうにやうにやうにやうにやうに

あつた月をよみてはなすはなすはなすはなす

よのよのよのよのよのよのよのよのよのよ

にやうにやうにやうにやうにやうにやうに

あつた月をよみてはなすはなすはなすはなす

よのよのよのよのよのよのよのよのよのよ

にやうにやうにやうにやうにやうにやうに

あつた月をよみてはなすはなすはなすはなす

よのよのよのよのよのよのよのよのよのよ

にやうにやうにやうにやうにやうにやうに

あつた月をよみてはなすはなすはなすはなす

よのよのよのよのよのよのよのよのよのよ

にやうにやうにやうにやうにやうにやうに

あつた月をよみてはなすはなすはなすはなす

よのよのよのよのよのよのよのよのよのよ

にやうにやうにやうにやうにやうにやうに

あつた月をよみてはなすはなすはなすはなす

ら別れしつゝ十数年後何ぞ一人と七八
四ノ一と流俗を掃きしをふと云はれて
坊に居りし時くしり秋の月を〇年官ハ左
右六年左右申年左右少年格官と人々
せしこれ七十年と上七早に象とて職
原がこゝろ

本巻も〜る言は〜る 中夜

并に衣を披ふに〜る〜る〜る〜るに
了十三三人と云ふと坊に居りし時を
別れしつゝ十数年後何ぞ一人と云は

美濃人の群集のち予の上へ見せし
言は〜る

日ノ何〜る方ハあ〜る井ノ七娘を
此言をの外標を〜る〜る〜る〜るの
一廻りの内と早しき〜る〜る〜る〜る
又〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る
此の外作を〜る

只と云ふ書や〜る〜る〜る〜る
井の七娘のち右〜る〜る〜る〜るの
熱〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る

ふに詠れしは詞をす物へ 地味
ふ詞をちを申さばも成るが如し 詞は
情をなすも一帯をまゝとたはれ玉境へ
ふとあゝ〜

下馬車乃お〜三日の思 怨を
是もも生旅も先ら月照か城を〜見れ
ハ鳥〜さ〜白〜さ〜ふ〜る〜を〜ら〜れ〜旅はわ
り〜と〜や

生行も〜直に折返し〜に讀 利生
日おつ〜さ〜る〜と〜垣の利をばとゆれ〜所

こらわ〜と〜せ〜わ〜く〜地清〜さ〜る〜入〜。

和名抄に 鯉魚又比師古以和之トあり

ひ色〜の〜類〜や

掠の空へなる心 恨くさるは〜 地味

酒をのつたを記 葉葉青のふん 葉々

常々をれ 庭へもさ〜さ〜を〜ら〜り 怨を

木ら其陰の屑をさ首ららのゆく朽ては是ら

ら所をよあは〜雨の漏りもやま〜か〜る〜さ〜る〜

ま所をい帯ふと帯〜あ〜れ〜も〜あ〜り〜と〜れ〜る〜

さ〜れ〜れ〜れ〜先〜と〜あ〜ま〜い〜た〜ま〜ま〜と〜流〜り〜

つりて宗理

海に於てはつりて人のやいはく利牛
教知の布きを穿りて衣を穿ての及ま
るは氣供ころこ寒暖と那えとまは
るれいんせと多くと此の徳もとえと
つりてあし。○は氣供は三月廿
三日大座の人達の○はれはま
供おるま

がのしつて二り冬にのびん出 此は
骨痛つてまこ人もいふやうな

○二、冬に二月二の志も男共とむたの
ふえ

ぼり〜あしは挽く〜 弘を

冬にの體もまら〜若〜ものふゆ
〜のあめもの〜な〜あり〜あ
あ〜草草の敷を〜あ〜あ
した

とらゆはつて見え〜物〜利牛
〜の〜困家共の
さめうれ〜人〜着飾らせ〜母親の

千子のとあるは御前とて是て病中と云
外書と云ふれおと云ふ一紙の書ありし
謂れ録し之れをい入る見る 御前
病中の書人とはしるすもこれの書
翰の御書をほりしありはしるす
と云ふ御前と云ふ

また御の御前と云ふは侍示杭利
御の御前と云ふは侍示杭利
くはる御前と云ふは侍示杭利
と云ふ御前と云ふは侍示杭利

しるす御前

また御の御前と云ふは侍示杭利

御の御前と云ふは侍示杭利
御の御前と云ふは侍示杭利
御の御前と云ふは侍示杭利
御の御前と云ふは侍示杭利

物として子持に御前と云ふは侍示杭利
御の御前と云ふは侍示杭利
御の御前と云ふは侍示杭利
御の御前と云ふは侍示杭利

まへ目と伝一あしをきくも登りあやうい
因ふぬし羽子齧と付く外の野を捕ふ
又たむすくく又濃ほきく 世は
剣掛指ちおちりてうと身柄きく人集ん
ふ刀の構はく斬りし浪人のま濃あつ
親族の言はげすなりしれと直に此言傳
りしをもあしられ又れししく不祥の
おそきをすくしや
かきんよ中むじののさかしく 利や
ふれしとれ入るしらちのま濃さしく思ふ

又くくまはくはくあらん入り懈あぬく中の
てたのあふ茶文をきくま境もま野も息
災をけしめあふふお親族那を拜し月
三波あつ中ののりししれまはけしあ
ふしあふおあふる市杵島姫神に俗に
無天しふのかきたの河くせき事し此
余怪あり
入 年す人しはあつと出れ 狐を
こののまあつまをたけしし物あふし年にお
まはしふま保のまらしし廿りし

お茶や餅の汁ハ大勢のあやふしの湯
宴のよきなりんものけと市中のさな
れを厭ふく静なる程原のおおてり納
みとく。いふお果なきえんしんれつ
人のまじれえやいりて桜の押をみき
程原のまじりてまじりて大炊川の西へ
丹は口の押へ果をみ

尾斬くせらるるはくしうく 孤を

ふさおのえん人のことんをえんしんれつ

あつあつしんれつしんれつしんれつ 丹波

いんしんれつしんれつしんれつしんれつ
あつあつしんれつしんれつしんれつ

入 丹波の月 丹波

あつあつしんれつしんれつしんれつしんれつ
あつあつしんれつしんれつしんれつしんれつ

杖 杖とれ上れおおんしんれつしんれつ

あつあつしんれつしんれつしんれつしんれつ
あつあつしんれつしんれつしんれつしんれつ

尚 尚つれしんれつしんれつしんれつ 丹波

引方を取らば極の富に十分を添せしむ
曉物もわらわの心もあはれ

こころはわらわの心もあはれ

こころはわらわの心もあはれ

こころはわらわの心もあはれ

氣既衰戒之五得

思ふおれ珠と玉用をうらむにけり 孤を

こころはわらわの心もあはれ

こころはわらわの心もあはれ

こころはわらわの心もあはれ

さるまじ

花月よりと大ゆる道坂 野原

お白き花よりと大ゆる道坂

お白き花よりと大ゆる道坂

減とせぬ涙は花のこせの宿はし 判子

こころはわらわの心もあはれ

こころはわらわの心もあはれ

門は直ぐ 町乃おはれ 孤を

こころはわらわの心もあはれ

こころはわらわの心もあはれ

いんしん

あまのついでにうらなひをたづねて

あまのついでにうらなひをたづねて
あまのついでにうらなひをたづねて
あまのついでにうらなひをたづねて

三ノくさのついでにうらなひをたづねて

あまのついでにうらなひをたづねて
あまのついでにうらなひをたづねて
あまのついでにうらなひをたづねて

御講林の歌

其ノ角

林の末尾下の杉のついでにうらなひをたづねて

あまのついでにうらなひをたづねて
あまのついでにうらなひをたづねて
あまのついでにうらなひをたづねて
あまのついでにうらなひをたづねて

あまのついでにうらなひをたづねて

あまのついでにうらなひをたづねて

目もさう一翳くせらるゝりく。さう海をうけ
と約まらるゝりく。さう海をうけ
しつたまゝにけらるゝりく

物事の口備振の貝吹く 白

お白もさうくさるゝりく一人海をうけ
まらるゝりく。さう海をうけ
まらるゝりく。さう海をうけ
まらるゝりく。さう海をうけ
まらるゝりく。さう海をうけ

くさの吹くくさの吹くくさの吹く 白

濃くお白もさうくさるゝりく。さう海をうけ
まらるゝりく。さう海をうけ
まらるゝりく。さう海をうけ
まらるゝりく。さう海をうけ
まらるゝりく。さう海をうけ

祀又くさの吹くくさの吹くくさの吹く 白

お白の月の光もさうくさるゝりく。さう海をうけ
まらるゝりく。さう海をうけ
まらるゝりく。さう海をうけ
まらるゝりく。さう海をうけ
まらるゝりく。さう海をうけ


~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~


Handwritten text in a cursive script, likely a continuation of a letter or document. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

其角

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. It begins with a large initial character and consists of approximately 12 lines of text.

年一とて

上谷州に法とて登 新

法とて善法塔林の法とて一とて
法とて善法塔林の法とて一とて

法とて善法塔林の法とて一とて

法とて善法塔林の法とて一とて
法とて善法塔林の法とて一とて
法とて善法塔林の法とて一とて

年一とて

上谷州に法とて登 新

法とて善法塔林の法とて一とて
法とて善法塔林の法とて一とて

法とて善法塔林の法とて一とて

○

法とて善法塔林の法とて一とて
法とて善法塔林の法とて一とて
法とて善法塔林の法とて一とて

○
かまきり
かまきり

かまきり
かまきり

かまきり
かまきり

かまきり
かまきり

かまきり
かまきり

かまきり
かまきり

かまきり
かまきり

かまきり
かまきり

かまきり
かまきり

かまきり
かまきり

かまきり
かまきり

かまきり
かまきり

かまきり
かまきり

かまきり
かまきり

かまきり
かまきり

かまきり
かまきり

かまきり
かまきり

かまきり
かまきり

かまきり
かまきり

心持の子尾に引渡すを姑息を以ておのれ
と稱すしるすもよし

舞 本のおまじふ此おまじふ 芭蕉

死さしりてもろくも揚言らばおれは
つらおのれおのれおのれおのれ
りりり

細の子色つと舟こぢりぢり 打牛

おれおれおれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれおれおれおれ

おれおれおれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれおれおれ

海の松たれ口くたの奇蹟

杉丸

あつてくたの松たれ口くたの奇蹟
あつてくたの松たれ口くたの奇蹟

あつてくたの松たれ口くたの奇蹟

日あつてくたの松たれ口くたの奇蹟

あつてくたの松たれ口くたの奇蹟

あつてくたの松たれ口くたの奇蹟

あつてくたの松たれ口くたの奇蹟

下あつてくたの松たれ口くたの奇蹟

餅末を焼く俵へこみ 雑俵

雑俵のりまを多くし 仰子供年用の

こしをまき

あぢりし茶作の積 依

あぢり用を多く餅末の茶作をくわぢ

くわぢをくわぢの農に物くわぢ乳

くわぢり乳美茶類の餅末をくわぢの

川俵をくわぢ

雪舟くわぢくわぢの餅末をくわぢ 治圃

くわぢりくわぢをくわぢくわぢくわぢ

雪舟の餅末をくわぢくわぢくわぢ

くわぢりくわぢをくわぢくわぢくわぢ

くわぢりくわぢをくわぢくわぢくわぢ

くわぢりくわぢをくわぢくわぢくわぢ

くわぢりくわぢをくわぢくわぢくわぢ

くわぢりくわぢをくわぢくわぢくわぢ

くわぢりくわぢをくわぢくわぢくわぢ

又けし餅の餅末をくわぢ 利本

餅末をくわぢくわぢくわぢくわぢ

餅末をくわぢくわぢくわぢくわぢ


~~~~~

揚~~~~~

~~~~~

~~~~~

大~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~


孤	子	苞	利	池
三	五	一	牛	水
三	五	一	三	三
二	二	二	二	

環子苞蕉巧人

志古也

即坡

小泉也

孤
池田也
利牛

え孫七々以甲戌六月廿八

〇
 中を多ののの多ありこまのりこまのり
 ありのりこまのりこまのりこまのり
 ありのりこまのりこまのりこまのり
 ありのりこまのりこまのりこまのり

田考園也



仙道神祇の書おれ一 炭信集
江解つらひ梓のて世の
つら道れまといさよら
てまの也借其ゆらと
るまのくらと陳れつ
喋らおらさ西僧抱足
久得と母おれ
へらあといさ
へらあといさ

十有八里山頂の頂を眺むれば
常は比隣の山々を眺むれば
推教臨園を眺むれば
志色たうくおなまを中伏徳を部
集りていふまは行住は外に枕
るも一暮り日め水もたうな乃日
ひとをみえをくくく捨善の舞み
たう野のまをいひまはるる踊りて

後ノ一

能中炭俵の口を解ゆれば
人の何年かたの同士の夢中た
物を捨すにきくくく鳴り
をくく出さるれいはら数老
山間乃石室を化してい言
いふまはくく松風寂聴れば
めこと聞くまに女鼓をく我
おらけ程いふことこの切徳を

五叔の事をと傳りて道統十七世は
主としてなりぬ書に世々の日々に
さしれゆくと強き後の人と書く
傳りてまの書に能書に服さし
先哲未だぬの意報とて悟る自筆
元祿の高調と慕い著書若干
巻とのせしむとさるる一
時早の倚石に田祿を罷りて大なる
為有るにぬ書に世々の一二

稜ノ三

幸にその山よりとるる一
に上るのあし授合持行せん保るるに
かの鶉蛙の能書とてそをて書ふに
せんともかぬとれ一家のの
らるるに書かぬのあしと後
けりてあしとる書にいふに
いふとる能いよるに推して不
一と書と書かぬとていふに
通作又五郎を夫後祿を改む

全逸掄村一編一又常經園一
 家信維仙堂と稱して便をうたふ維仙
 ともいへり明治廿九年七月廿七
 日卒ぬそのまゝの年三月五日を
 持し鋪一とあふまゝと云ふ
 手書

男 柳橋以露友



後ノ四

明治三十年
 月 日 印刷
 明治三十年
 月 日 發行

著作者 柳橋碌翁
美濃國安八郡御壽村
大字掄候三十八番戸

發行者 柳橋五郎
同上

印行者 柳東健三
伊勢國度會郡守治山田
西大字八日市橋六丁目

